

欲

私はこれまでとても多くの人とお会いした。そしてとても多くの人とお別れした。これからもまた、多くの人に会うことであろう。そしてお浄土まで一緒に歩むことの出来る人は少いであろう。二年三年と一緒に暮した人さえ、今はどこにいるのかさえよくわからなくなる。

人は何故に離れなければならぬのであろうか。一つ心になりきって生きたいと言う悲痛な願いを持ちつつも、分裂して別れてゆかなくてはならない。それは一体何がその原因であるのか。

人と人とが真に融け合うと言うことは容易なことではない。重ねて言う、人と人が真に融けて一となるということは容易なことではない。

人は好きな人と愛し合った時は一つになったように思う。また利害が一致した場合にも一つになったように思う。しかし人間の愛、それは二本の生木に油を注いで火をつけたようなものである。燃えている時だけは一つのものであっても、油がつきて炎が消えると、二本の生木がくすぼって別々に横たわっているのに過ぎない。利害が一致した時、意見が合った時、一つになったようでも、一度利害相反すれば、仇敵にさえなってしまう。

子供が小さい時、その母の愛は神の如くにさえ輝く、そして子供はただ無条件にその懐に抱かれる。しかし子供が成長しても親子の間は完全に一つであるか。親子の間の瞋恨は時に世の如何なる苦惱よりも、人にとつての最大悲惨事となる。

親子、夫婦、兄弟の間は何故に一つにならないか。人は何故に怨み悪まなくてはならないか。私は家庭悲劇の訴えをあまりにも聞きすぎる。

人間は欲心の塊であると言われる。確かにそうである。睡眠欲、食欲、財欲、名利欲、色欲、この五欲こそ人間の全てであるかの如くである。人間がこの五欲のみによって動く限り、過去も欲、現在も欲、しかして未来もまた欲、欲を満たさんとして三世を貫くに、我慢を以つてするかぎり、人間は誰とも一つになる事はできない。人は一つになりたいと願いつつ、ついに一つになることができないのは、ただ我欲、貪欲がものを言うが故である。

この欲の塊である人間が真に一つになることは極めて困難なことである。

愛は憎しみをはらみ、欲は我利主義となつて鬭争をともなう。貪欲は時に瞋恚の炎と変り、愚痴の黒煙となる。親は子を呪い、子は親を悪む。家庭苦の大部分は愛憎の問題である。分裂して戦えば戦うほど苦痛が増す、苦しみが増すが故に、この苦痛を出でんとして、更に相手の仕打ちを指摘して善悪を裁き、より深き分裂へと陥つてゆく。しかし、そこには最後まで愛憎と利害がものを言う。

誰かを怨む時、人は必ず味方を求める。悪しみに加勢し、情を同じうする人と、一つになったように考える。しかしそれは浮雲のようにはかないものである。決して深い生命の本源において一致融合したものではない。

かくして我等は「一つになりたい」との願いを持ちながら、この衷心の願いの満足はついに与えられないのであろうか。世には「いづれ人間が一つになれるものか」と

言う人がある。もしそうであるならば我等はもはや人生における真剣な生き方のすべてを捨てなければならなくなる。生きること何等の意味を持たなくなる。

しかし我等はここに、幸にも愛憎を超え、欲を超えての第三の世界のあることを念仏を通して知らして頂いた。大無量寿経のみ教えを通して、如来召喚の勅命に聞き、その信心海の広大さがわかりはじめた時、

「同一に念仏して別の道なきが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内、皆兄弟となすなり。」

との曇鸞大師のみ言葉や、阿弥陀経の「諸上善人俱会一処」の文字が、空文でないことがわかつて来る。同一の教えに生き、同一の行を行じ、同一の信を呼吸し、同一の理想の彼岸に歩ませて頂く時、我等は初めて、ここに、全く欲中心の世界とは違った、如来大信心の世界において、人は初めて一つになり得ることを知らしめられる。

人間は欲の塊である。しかし欲心を持ちつつ、彼岸の清浄真実なる如来大悲の召喚の声を聞くことが恵まれてあつた。

貪欲は汚い。汚いが故に、貪瞋煩惱中に、清浄なる大信心を成就せんとしたもう如来は、清浄光仏となりたもうのである。清浄光仏は衆生の貪欲を退治し、転成して、大善大功德を衆生の上に成就せんとしたもう如来の光明の相である。清浄光仏の光に照されて、貪欲は懺悔の色に染むのである。そこに自己を他の全てに融かず、新しい道が開ける。

釈尊のみ教えは、我等の欲心の上に、徹底的な否定の大鉄槌を下される。しかしそこに二つの生活相が示される。

一は捨家棄欲と、欲そのものを捨てる生き方であり、
一は在家止住のままに、欲を超える生き方である。

釈尊は一切のものを捨てたもうた。王位を、宮殿を、美妃を、愛児を、その他の一切を。これ正しく捨家棄欲の道をたどられたのである。これは何の為であろうか。憶うに釈尊にあつては、かくの如くなしたまわずば、一切衆生は救われぬであろう。一切を棄てて無一物となり、しかも、そこに、無一物中無尽蔵の安心境を示したまわずば、一切衆生は、欲心をそのままに肯定して、欲心の満足に囚われて、道を知らぬであろう。

人間は欲の塊りである。であるが故に大部分の人は欲心に使われて、一生を空費する。しかしそれでありつつ、欲心は決してその人に歓喜を与えないで、時に人を死地につれこみ、火炎の中に追いやる。欲心より外に人を墮落せしめる何ものもない。仏陀の大悲はそこに注がれてある。欲心こそ悪魔のつけ入る唯一の穴であり、その巢である。釈尊はまず、この欲心と共に、欲心の対象のすべてを捨てて、大道を成就したもうたのである。

ああ、欲心。汝の胸中に動く。何故ぞ無明の深く、欲心の執拗なる。一欲去つて更に二三四……、汝はついに欲心の塊ではないか。享樂に非ずんば、蓄財、財物に非ずんば名利、名利に非ずんば愛欲、得々然たるもこれが為である。悲観絶望するもこれが為である。刻々底なき苦しみに沈むを知るも、この心去らず。益々己を包んで世間を飾る。

『菜根譚』に曰く、

利を好む者は、道義の外に逸出す。その害顕れ、而して浅し。
名を好む者は、道義の中に竄入す。その害隠れ、而して深し。」

利欲を好む者は、最初より人の履むべき道義を無視して、仁義道德の外に逸出すから、その悪事害毒は世間に顕われて人も注意するから害毒も浅いが、名譽を求むる者は常に仁義道德の中に竄入して、表に道を立て、内に悪事をはらむが故に、世間に隠れて人も注意しないが故に、その害毒も甚大である、と言うのである。凡夫の正体、その肺腑について余すなしである。

欲心許すべからず。しかも凡夫は欲心の塊である。我等は如何にして救われるのであるか。

「悲しき哉。愚禿鸞愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の證に近づくことを快まず。恥ずべし。痛むべし。」

念仏道は、愛欲名利の欲心さながらの中に開く。欲心を棄てて開く道に非ず。欲心をそのままに肯定して開く道に非ず。捨家棄欲と、家を棄て財を捨てるも、内心に動く名利愛欲を如何にせん。如来の清浄光は、名号となり、本願力となつて、欲心そのものにはたつき、欲心を欲心と信知しめることによつて、欲心さながらに、絶対聖化したもうの道である。愛欲そのものの中に咲きたもう念仏清浄の華である。

されば念仏道は、家を捨て妻子を棄てるに非ず。家に名利に執着して、欲を以つて生命とするにも非ず。欲にいつつも、欲を欲と知るが故に、欲よりも尊き如来の真実によつて現実の無限の暗黒を照破せられて、如来本願大悲を領解するのである。

人間は欲心の塊ではある。しかし欲心からは何らの尊いものも生れはしない。法然、親鸞両聖人をはじめとして、一切の聖者にも欲はあつたのだ。しかしその全人格の上に動く仏心、南無阿彌陀仏の中から尊き人格を顕現したのである。仏心は大慈悲であり、光明であり、大善であり、大功德であり、道であり、願力である。されば、信仰は理想を追うて歩む道ではなくて、久遠の大理想の実現である。

人と人が一つに融け合うことは容易なことではない。しかし我らは念仏世界においてのみ、それが成就することを知つた。しかしそれは「私は貴方とも、貴方とも、心がとけて一つになった。」といったような、浮いた総花式な好感情ではない。人間は依然として独生独死独去独来の寂しい運命ではある。我を好む人もあれば、我を嫌い悪む人もある。しかし我を好む人に好むが故に盲にならず、悪むからとて悪みきらねず、大悲の御心は怨親平等である。本願の前には善悪浄穢はない。その大悲の御心がわかる時、念仏することより外に、他人との間の愛の成就も、同心一体もあり得ない。たとえ万人好意を持つて来るとも念仏申すべきであり、万人去るとも念仏すべきである。念仏は、我の城壁をこえて、如来の大悲に乗じて、万人にとけてゆく世界である。万人の出かたによつて変わる世界ではない。

如来と衆生とを一にする親縁が、如来の本願の実現より外にないように、教主聖人と我等の間も、また真実の教えより外に、何ら一つになるつながりはあり得ない。

私は近頃、私の言うことも書くことも読んでも見ず聞いてもくれずして攻撃し悪む人と共に、三年たつても五年たつても聖人の教えを共に歩まず、求めず、聞かぬ人の

私に対する尊敬が、泡のようになつまらぬことであることを、深く感ずる。私を愛する
なら、私の前に一時間も二時間も坐っていないで、どうか私を一人でおらして下さい。
い。